

非制限的副詞節についての覚え書き

A Note on Nonrestrictive Adverb Clauses

内 田 恵

Megumi UCHIDA

（平成13年10月9日受理）

0. はじめに

when, because, though, ifなどの従属接続詞によって導かれる副詞節は、それらを含む構文全体の情報量を豊かにする役割を果たしている。それは主節の命題内容に対して、時を明示したり、理由や条件を述べたりする機能を意味的には果たすことになる。また統語的には動詞句あるいは文全体を修飾する関係のどちらかを示す。さらにこの意味と統語の側面は使用される場面によって語用論的に微妙に異なってくることが多い。

本稿では理由を表す副詞節について、意味と統語の面から考察する。具体的にはbecause節を中心に取り上げ、類似した意味を表すas節や関係代名詞節と比較検討をする。1節では2種類の意味を持つbecause節について意味と統語の特徴を分析する。2節ではasを取り上げる。特にasは接続詞と関係詞の用法があるので、wh型関係詞節の非制限的用法と対比して論ずる。3節では、非制限的用法と制限的用法全般について1節と2節で分析した結果を参考に考察する。

1. becauseの文法

1.1 becauseの意味論

because節のもつ意味については、主節との関係で多義性が生じる。(1)のように2種類のbecause節が一度に使用される場合が特に顕著になる。

(1) He's absent from class because he's sick, because his wife just told me. (安井 1987)

(1)は「病気だから彼は授業に来ません。なぜならばたった今奥さんから連絡があったから。」という意味になる。because he's sickは「彼が来ない」という事態を直接的に説明するものであり、他方because his wife just told meは補足的に病気で彼が来ないことに対して話し手としてのその根拠を付記していることになる。前者を「制限的用法」、後者を「非制限的用法」と通例呼んでいる。さらに(2)の例を見てみよう。

(2) John smokes(,) because he has cigarettes in his house. (廣瀬 1998)

(2)は「自宅にたばこがあることが原因でジョンは喫煙するに至っている。」という解釈と「自宅にたばこが置いてあるという事実からジョンは喫煙者に違いない」という推論の解釈をもっている。前者はbecause節の内容が主節命題の原因を示しているのに対して、後者は主節命題の推定的判断を結論として導くための論拠をbecause節が提示するという意味機能を果たす。

また、否定辞が入った次の文にも多義性が生じる。

(3) John didn't sell his bike because the gears broke. (Johnson 1994)

(3)には「ジョンはギアがこわれていたのでバイクを売らなかった」という解釈と「ジョンはバイクを売ったがそれはギアがこわれていたためではなく他の理由による」という読みの2通りが可能である。¹すなわち否定辞のかかり方が前者は主節だけに留まっているのに対して、後者は文全体にかかっているからこのような2通りの解釈が生じる。こうして見てくると、because節には理由を述べるという単純な定義の背後に多様な意味が存在しているようである。

1.2 becauseの統語論

(1)–(3)の例をで見た2種類の用法は統語的にも興味深い対称性を示す。そこでさまざまな統語操作をおこない、容認可能性のゆれを検証してみよう。

まず、主節と非制限的because節の間にはコンマが置かれることが通例である。しかしながらこの単純な区別は(1)では効果的であるが、(2)や(3)からすべての場合に通用しないことがわかる。コンマはあくまでも解釈上の参考となる目印にすぎない。ただしこのような事実はともかく、コンマがあるのは制限的because節ではないということだけは最低限言えそうである。第2に制限的because節は分裂文の焦点の位置に生じるが、非制限的because節は生じることは原則としてない。(1)を使って試してみる(安井 1987参照)。

(4) a. It is because he's sick that he's absent from class.

b.*It is because his wife just told me that he's absent from class.

このことは担っている情報量の差に還元できる。すなわち新情報が配置されるit.....thatの位置には、付加的な情報である非制限的because節はそぐわないことになる。

第3に非制限的because節は文頭、文末の両方に現れるのに対して、制限的because節は文頭にくることはできない。これは制限的用法が一般的に主節命題に対してコメントをするということから導きだせる帰結である。

(5) Because the gears broke, John didn't sell his bike.

(5)のようにbecause節を前置すると「ジョンはギアがこわれていたのでバイクを売らなかった」という解釈に統一されて、「ジョンはバイクを売ったがそれはギアがこわれていたためではなく他の理由による」という読みは出てこない。

第4に制限的because節は疑問の作用域に入るが、非制限的because節は入ることができない。(1)を基本に操作を加えて調べてみよう。

- (6) a. Is he absent from class because he's sick?
 b. Is he absent from class, because his wife just told me?

(6 a) はbecause節まで含めたものが疑問文の対象内容となり、(6 b) はbecause節は疑問文で尋ねる内容にはならない。(6 a) はbecause節は因果関係(原因)を示し、(6 b) は主節に対する動機(推論)を示している。

第5に付加疑問文について考えてみよう。付加疑問にする部分は断定を示す情報量が多い部分である。

- (7) a. John didn't sell his bike because the gears broke, did he?
 b.?John didn't sell his bike because the gears broke, didn't they?

(7 b) のようにbecause節の内容を問い返すことは、情報量がきわめて多い場合を除いて少ないと言えよう。

第6に否定との関係を見てみよう。制限的because節は否定の作用域に入るが、非制限的because節は入ることができない。

- (8) Tom didn't beat his wife(,) because he liked her.

(8)は「トムは奥さんを愛していたので殴ったわけではない」という解釈と「トムは奥さんを愛しているので殴らなかった」という2通りの解釈が可能になる。すなわち前者は否定辞の作用域が文全体までおよぶ制限的用法であるのに対して、後者は非制限的用法であり作用域が主節に限定される。1.3節ではこの2種類の解釈を反映する根拠あるいは区別する理由を派生過程や内部構造の違いに求めてみよう。

1.3 because節の派生

Johnson (1994) は2種類の解釈が存在するのは構造の違いに由来するとしている。

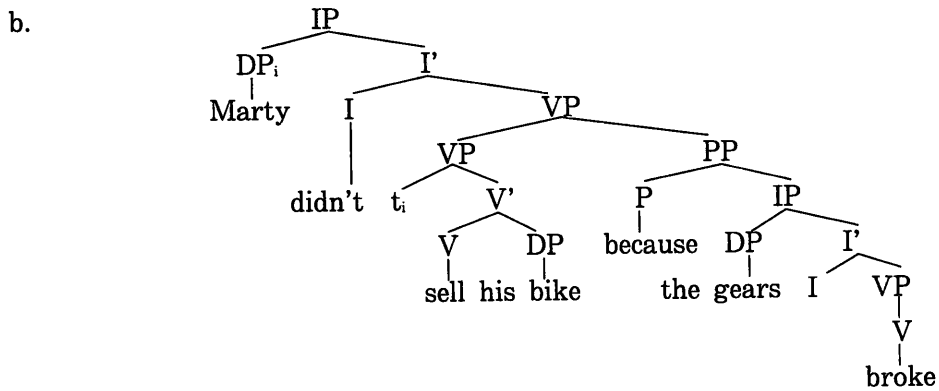
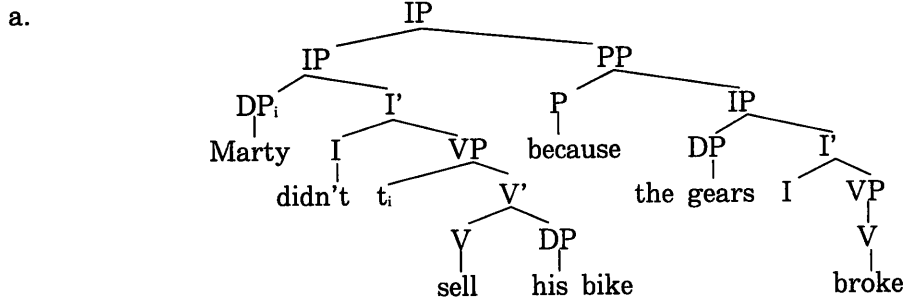
- (9)=(3) John didn't sell his bike because the gears broke. (Johnson 1994)

(9)は「ジョンはギアがこわれていたのでバイクを売らなかったのではない」という制限的用法と「ジョンはギアがこわれていたのでバイクを売らなかった」という非制限的解釈が可能である。ついでながら(9)の主節とbecause節(従属節)の順序を入れ替えてみよう。

- (10)=(5) Because the gears broke, John didn't sell his bike.

この場合は非制限的な解釈しかできないことになる。なぜならば否定辞notはその前に位置する節にまで作用域を広げることができないからである。Johnson (1994) は次のような内部構造を仮定している。²

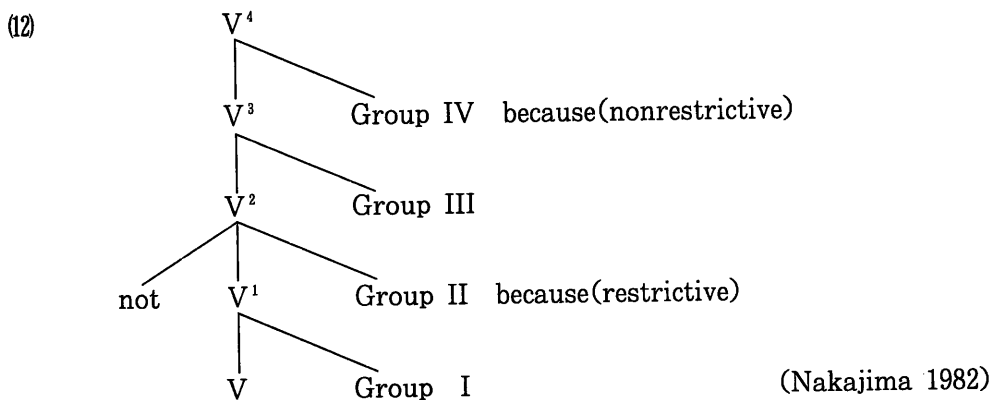
(11)



(a-b, Johnson 1994)

(11a) ではnot (didn't) はbecause節を構成素統御 (c-command) できないので、because節はnotの作用域に含まれない。したがって否定の解釈がbecause節に及ばない形すなわち非制限的because節の内部構造がこのタイプに相当する。一方、(11b) ではnot (didn't) がbecause節を構成素統御 (c-command) しているのでbecause節を作用域にする。ゆえにnotは主節と同じくbecause節をも否定することになる。これが制限的because節の内部構造と仮定される。

2種類のbecause節の存在の根拠を構造の違いに求める分析はNakajima (1982) でも見られる。Nakajima (1982) では、X'理論に基づく副詞はグループごとに内部構造で占める位置が異なるという分析を提示している。本節に関係のあるところをまとめると(12)のようになる。



(Nakajima 1982)

Nakajima (1982) は(12)のような階層構造を提案して、文はVの最大投射V⁴であるという立場を基本

に副詞節はこのいずれかの階層に付加されると主張している。その根拠は(13)のようにまとめられているが、1. 2節で観察した例を表の右側に書き加えてみる。

(13)	I	II	III	IV	例
do soによる置換	ok	*	*	*	
分裂文の焦点	ok	ok	*	*	(4)
否定の範囲内	ok	ok	*	*	(8)
主語省略	ok	ok	ok	*	
文頭前置	ok	ok	ok	*	(10)
疑問文に生起	ok	ok	ok	*	(7)

本稿に関連したところのみに絞ってみると、グループIVにbecause節の非制限的用法が、またグループIIにbecause節の制限的用法が属している。グループIIはVPの意味を制限する機能を果たしている。一方グループIVはいわゆる文全体にかかる副詞節と言える。また(12)の否定辞notの位置からしてJohnson (1994) で分析された(11)と同様に、否定の作用域の問題も解決できる。個々の副詞節には(12)の例外もあるだろうが、2種類のbecause節に対しては明示的な説明を与えてくれる分析である。

これに対して、制限と非制限の区別を内部構造に求めるのではなく、because節の修飾機能の違いであると主張する考え方がある。次のような遂行節 (performative clause)³ を仮定して再び(1)を用いて検討してみよう。

(14) I SAY TO YOU he's absent from class because he's sick, because his wife just told me.

(14)でI SAY TO YOUは遂行節を表すものとする (Rutherford 1970)。遂行節は平叙文で断定機能をもつ文の根底にあるという特徴がある。まず非制限的because節 (because his wife just told me) は遂行節を修飾して話し手の主張の動機または根拠を表す。これに対して制限的because節 (because he's sick) は主節を修飾して事態の理由を表すと分析される。このように遂行節を仮定すると、2種類のbecause節は修飾関係の違いから導きだされることになる。

1. 3節では2種類のbecause節は内部構造が2種類あることに由来するという考えと、もともとは1種類のbe-cause節が異なる部分を修飾することに由来するという分析を概観した。次節ではbecauseと類似した意味を持つことがあり、かつ非制限的用法も議論になるという理由でasと関係代名詞whichについて調べてみたい。

2. 接続詞asと関係代名詞as

asはbecauseと異なり、品詞だけで分類しても接続詞、関係詞、前置詞の3種類がある。そこで2節では1節のbecauseおよびwh型非制限的關係詞節と関連させながら接続詞と関係詞の2種類にしばって考えてゆくことにしよう。

接続詞asには(15)に見られるように、「～なので」、「～につれて」、「～のように」という意味がある。

(15) a. As Tom was eldest, he looked after the other. (理由)

- b. As a tiger stalks his prey, they hunted him. (様態)
 c. As he grew older, he became more silent. (比例)

本稿ではbecause節との関連で理由のas節に限定して見てゆく。類似した意味をもつ接続詞because、sinceそしてasを比較してみよう。

まず分裂文の焦点に組み込むとbecause節だけ容認可能になる。ただしこの場合のbecause節は制限的用法に限られる。

- (16) It was because/*since/*as he was sleepy that he was careless.

第2に主節に遂行動詞を含むかどうかによって差異が生ずる。pronounceという遂行動詞が従属接続詞の用法に制限を与えるのかもしれない。

- (17) *Because/Since/As the records show that neither of you has VD, I hereby pronounce you man and wife. (安井 1987)

第3にwhy疑問文に対する答えの文になるかどうかを調べてみるとbecauseを用いた場合のみが正しい応答になる。

- (18) "Why isn't he coming to class?"
 "Because/?Since/?As he is sick."

また選択疑問文や選択否定文で対立することができるかどうかという点で異なる。

- (19) He is not coming not because/?since/*as he is sick but because/?since/*as he doesn't like school. (ibd.)

(16)から(19)の検証から、i) これら3種類の理由を表す接続詞の中でもbecauseとasは対称的な容認可能性のゆれを示す、ii) sinceが3つの中では中間的な位置にある、iii) becauseは非制限的用法では(16)の構文に生起できないことからして、主節に対する制限力の差異がこの3種類の接続詞にはあると推測できる、ということをおおまかにではあるが主張することが可能である。

次に完全な副詞用法ではなく、asの関係代名詞的な用法についてwhichとの比較検討を中心に調べてみよう。asは主節全体(文)を先行詞としているのに対して、whichは名詞句と文のどちらでも先行詞とすることはよく知られているが、それ以外の類似点と相違点を分析すると次のようなことが上げられる。まずasとwhichが生起する位置について考えてみよう。

- (20) a. As/*Which you probably know, Kingston is the capital of Jamaica.
 b. Kingston as/which you probably know, is the capital of Jamaica.
 c. Kingston is the capital of Jamaica, as/which you probably know. (a-c, 佐藤 1997)

b. Lying is a great sin against God, because God gave us a tongue to speak truth and not falsehood.

(27) a. Ann thanked her teachers, who had been very helpful.

b. Ann thanked her teachers, because she had been very helpful.

(26a)、(27a) はそれぞれ (26b)、(27b) のようにbecause節で書き換えが可能である。

第2に非制限的關係節は主節現象としての倒置が起こる場合がある。

(28) a. The rotunda, in which stands a statue of Washington, will be repainted.

b. *The rotunda in which stands a statue of Washington will be repainted.

(Hooper and Thompson 1973)

第3に非制限的關係節は疑問文や命令文の中に生じることができる場合がある (Ross 1986, 長原 1990 参照)。

(29) Has John, who was here a minute ago, left? (McCawley 1981)

(30) Go to Cincinnati, which is on the Ohio River. (Jackendoff 1977)

第4に非制限的關係節は否定の作用域に含まれないので、その解釈は排除される。

(31) a. I didn't see the man who brought the strawberries.

b. *I didn't see the man, who brought the strawberries.

第5に非制限的關係節は数量詞の作用域に入らないので、(31b)と同様にその解釈は成立しない。

(32) a. Everyone there had a wife who loved him.

b. *Everyone there had a wife, who loved him.

このような非制限的關係節の分析結果はbecause節やas節にすべて共通のものではないが、非制限節がもつ基本的な特質であるように思われる。非制限節は独立節あるいは同格節と呼ばれることから推測できるように、非制限節には独自の発話行為がなされている場合がある。その場合は主節との関連性は薄れると同時に情報の重要度も主節と同等のものになる場合がある。このために(28)のように主節現象の倒置が起こったり、(29)や(30)のように疑問文や命令文に現れることができる。さらに、非制限節は情報量についても新情報ではあるものの、きわめつけの新しさをもって相手に訴えたいものはないと思われる。

次に副詞節について制限節と非制限節という観点から議論してみよう。because節もas節の一部もここに含まれる。まず情報構造から分析してみると、「旧一新」の原則的順序に従えば、文末に置かれる副詞節は新情報を担うことになる。また仮に主節が新情報を担う場合にも統語構造で上位にあるということから説明される。しかし、新旧の区別が判然としない場合がある。非制限的な副詞節は断定される。次のような例を福地 (1985) はあげている。

- (33) They must be Disney freaks, because on the wall is a huge portrait of Donald Duck.
(福地 1985)

(33)はbecauseに導かれる副詞節の中で語順転倒が起こっているが容認可能である。

以上の現象から (11b) の内部構造がさらに変化して、because節が「格下げ (downgrade)」されて、(11a) のように変化していったと考えてもさしつかえないように思われる。いったん格下げされると主節に近い現象が強い制約を受けないで起こってくると考えると妥当な説明に結びつく。

また(33)からも明らかなように非制限節は内容が断定的である。したがって主観を表す役割を担うモダリティ⁴とは相いれない。その証拠としてモダリティを表現する代表的な動詞であるthink、believe、seem、appearなどの動詞が現在形で非制限節に現れることはない。このことから、非制限節はコメントを扱う場合にも、より客観性のあるものを好み、主観性の強いコメントは避ける傾向があると分析できる。主観性の強いものは挿入節として文中に盛り込まれることができるので、挿入節と非制限節はモダリティという基準ですみわけが成立しているように思われる。

4. 結 び

本稿では、非制限節について議論した。1節ではbecauseに導かれる副詞節について制限節と非制限節の意味的・統語的特徴を分析した。2節では関係詞と接続詞の両方の顔をもつasについて制限・非制限という角度でwh型非制限関係詞節と比較しながら検討した。3節では制限と非制限という概念そのものについて考察した。両者の統語構造は異なるものであると言えるが、制限節の構造が格下げ現象を起こして非制限節の構造に変化したのではないかということ、wh型非制限関係詞節、because節、as節と‘I think’などのモダリティを表す挿入節、そして文副詞には断定性や話者の心的態度をどの程度表現できるかによって用法に一種のすみわけがあるように思われる。今後この2点について検討課題としてゆきたい。

注

1. Johnson (1994) によれば、前者をnegated head reading、後者をnegated adjunct readingと呼んでいる。
2. (11)は動詞句内主語仮説 (VP-internal Subject hypothesis) の立場を取っているので、主語は動詞句内に痕跡を残して移動した結果を示している。
3. 遂行分析 (performative analysis) は「遂行文と非遂行文の基底構造は同一である」という立場を採用する。SAY/TELLは平叙文、ORDERは命令文、ASKは疑問文の遂行動詞を表し、すべての構文はこれらのどれかを主節に採り、補部として埋め込まれたものと仮定する。
4. モダリティとは話者の命題に対する心的査定を意味する。瞬時的現在時を有する。

* 本稿は平成12年度科学研究費補助金「英語及び日本語の副詞類の実証的、理論的研究」(基盤研究(C)(2)課題番号 12610488、研究代表者 秋 孝道)の助成を受けている。

参考文献

- Declerck, R. 1983. "A Restriction on Sentential Relative As-Clauses." *General Linguistics* 23-4, 265-282.

- Fukuchi, H. (福地肇) 1985. 『談話の構造』 新英文法選書 10 東京, 大修館.
- Hirose, Y. (廣瀬幸生) 1998. 「構文間の継承関係-because節主語構文の構文文法的分析」 英語青年 12月号, 511-514.
- Hooper, J and S.A. Thompson. 1973. "On the Applicability of Root Transformations," *Linguistic Inquiry* 4-4, 465-498.
- Jackendoff, R. 1977. *X' Syntax*. Mass., MIT Press.
- Johnson, M. 1994. *The Syntax and Semantics of Adverbial Adjuncts*. Ph.D dissertation, University of California.
- Kac, M. 1972. "Clauses of Saying and the Interpretation of because," *Language* 48-3, 626-632.
- McCawley, J. 1981. "The Syntax and Semantics of English Relative Clauses." *Lingua* 53, 99-149.
- Nakajima, H.. 1982. "The V⁴ System and Bounding Category," *Linguistic Analysis* 7, 341-378.
- Nagahara, Y. (長原幸雄) 1990 『関係節』 新英文法選書 8 東京, 大修館.
- Quirk, R., S.Greenbaum, G.Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London, Longman.
- Ross, J.R. 1986. *Infinite Syntax!* Norwood, N. J. Ablex Publishing Corporation.
- Rutherford, W. 1970. "Some Observations Concerning Subordinate Clauses in English," *Language* 46-1, 97-115.
- Sato, C. (佐藤ちゑ子) 1997. 「文関係詞as節」 静岡精華短期大学紀要 第5号, 15-29.
- Yamanaka, N. (山中紀子) 1985. 「文を先行詞とするas節(1)」 英語教育 12月号, 71-73.
- _____. 1986. 「文を先行詞とするas節(2)」 英語教育 1月号, 64-66.
- Yasui, M. (安井稔) 1987. 『例解現代英文法事典』. 東京, 大修館.